ひとはく図鑑

宝塚カトリック教会

阪急今津線で宝塚南口駅付近を通過するとハイヒールをひっくり返したような不思議な建物をみることができる。村野藤吾という文化勲章や日本芸術院賞を受賞した日本を代表する建築家の作品の宝塚カトリック教会である。彼は関西に数多くの作品を残している。

本来、静寂な場所が適していると思われる教会だが線路脇の住宅地内という敷地条件である。敢えて線路際の角に建築を寄せて配置し、建築自体が防音することで静寂な庭をつくりあげている。村野の作風の一つである地面から這い上がってきたような荒々しい湾曲する壁面に沿って入口より室内に入る。するとアルコーブの薄暗い中に照らし出されたマリア像が出迎えてくれる。その先に進むと、うねるような板張りの天井によって乱反射した光が包み込む広がりのある内部空間である。うねるような天井は東の角の祭壇に向かって次第に低くなって行き人々の意識を集中させ、祭壇に到達すると塔状につまみ上げたように上昇していく。線路側の壁は連続して音を遮り、住宅街側の壁は断続的にすることで、住宅街の猥雑さ目線を切りつつも、隙間から採光を間接的に取り入れている。光が巧みに操られた神秘的な空間である。教会に依頼すれば内部を見学させてもらえる。足を運んでみてはどうか。

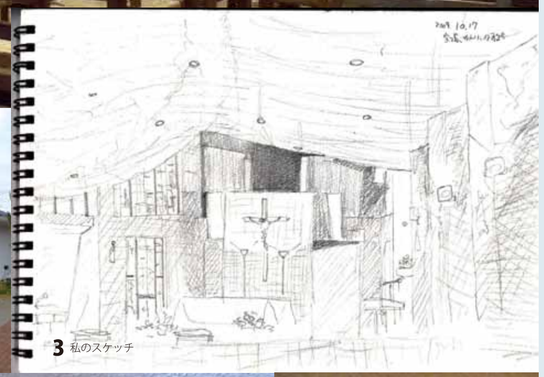
また、建築スケッチ紀行という一般セミナーを2009 年より実施している。建築を訪ね歩き、見聞きしスケッチしながら、建築を体感しつつ、建築家たちの考え方などに迫っていくセミナーである。是非、ご参加あれ。

山崎義人（自然・環境マネジメント研究部）

［参考引用文献］
山崎義人「美の現場から　村野藤吾の建築作品を巡って」芸術文化雑誌「紫明」第 27 号 , 紫明の会 ,p79-p83,2010.10

1 教会の内部空間

2 庭を包むように湾曲した壁面の建物正面


3 私のスケッチ

4 ハイヒールをひっくり返したようなユニークな外観

5 湾曲した壁面に導かれる入口

6 入口付近の低い天井が、内部空間の広がりを演出する

7 村野藤吾が得意な階段の演出

兵庫県立人と自然の博物館 Museum of Nature and Human Activities, Hyogo http://hitohaku.jp
hitohaku news paper
学びっ！
人と自然の応援情報誌　ハーモニー75号　23教㊐2-008A3

ひとはく新聞

2011/12/25号 平成23年 保存版

TEL：079-559-2001（ひとはくの代表番号です）
TEL：079-559-2002（学校や団体のご利用の方はこちらにおかけください）
TEL：079-559-2003（セミナーやイベントなどのお問い合わせ先です）

〒669-1546
兵庫県三田市弥生が丘６丁目
兵庫県立人と自然の博物館
（兵庫県立大学 自然・環境科学研究所）
http://hitohaku.jp

副館長がみた「ひとはく20年の歩み」前編

「ひとはく」誕生の原点は、「県立自然科学博物館設置」に関わる請願（兵庫県自然保護協会、昭和48年）と「人間居住環境研究センター」の提言（IFHP兵庫国際会議、昭和51年）にある。県教育委員会に自然系博物館(仮称)設立準備室が設置（平成元年）され、場所を県庁周辺の兵庫県警本部別館、中尾ビル、生田庁舎と転々としながら、スタッフの充実と共に、基本構想・計画、展示計画、資料収集と着実に開館への準備が進んだ。歴代の準備室長、館長の在任期間を区切りに、副館長からみた「ひとはく20年の歩み」を顧みる。図に、「ひとはく」と「県立大学自然・環境科学研究所の各系」の歩みを示した。

初代準備室長は、霊長類研究の第一人者である伊谷純一郎先生である。世界の傑出した博物館を準備室員に視察する機会を与え、「世界に冠たる博物館を創ろう」「眠れる獅子よ目を覚ませ」「タコ壺に入るな」との合言葉のもと、教授制を導入した40人規模の研究博物館に向けての胎動がはじまった。平成3年3月上旬、日本初のこの仕組みが意思決定され、「ひとはく」の基本方向が決まった重要な時期であった。

二代目準備室長で初代館長が加藤幹太先生である。バランスある経営感覚で準備室をマネジメントして頂いた。特に、教授制導入に関しては京大時代の経験を存分に発揮頂き、準備室、県庁、大学（当時は姫路工業大学）の良好な関係を構築して頂いた。準備室員が「何かしでかすと先生の出番」という日々であった。漸くして、日本有数の博物館として、県立大学の研究所として、平成4年10月に秋篠宮殿下、秋篠宮妃殿下ご来臨のもと開館・開所式を迎えたのである。この時に「人と自然の博物館」が正式名称となり、順調な運営が始まった。しかし、平成7年1月の阪神・淡路大震災は、館には甚大な被害こそはなかったが、県全体でもそうであるが、館の運営面、財政面で、震災の影響が徐々に顕在化しはじめた。この時期に加藤館長は滋賀大学の学長候補者に選考され、館員にとっては誇らしさ、寂しさが入り混じったご勇退であった。

二代目館長は、再び霊長類研究の第一人者河合雅雄先生であり、館のテーマとして「共生博物学」が明確に打ち出された。今も継続しているマレーシア国立サバ大学と学術交流の協定、ボルネオジャングル体験スクールの実施、サバ州でのJICAとの共同研究等と、ひとはくの国際的な活動が胎動し花咲いた時期である。館員と共にマレーシアまで何度も出向かれ実践されていた。館では、ひとはくフェスティバルなどがはじまった。この時期に忘れてならないのは、ひとはくの意思決定機関としての経営戦略会議の設置（平成13年）である（同時期に副館長職も設置された）。一定の予算を使いながら入館者数が少ないという課題に応えるべく、「博物館の新展開」構想（平成12年）を、ラジオ関西、日本長期総合銀行、電通、文部科学省、大阪大学、マーケッティング等の外部の方々から助言を得て、ほぼ全館員参加で策定し、その成果として本会議が設置され現在まで継続・発展し続けている。今から思うと、博物館の新しいマネジメントを模索し、実践していたのである。また、開館からボランティアとして活動していた「人と自然の会」が、この時期に博物館ボランティアでは、県下では初のNPO法人の認証（平成11年）を受けた。（後編へ続く）

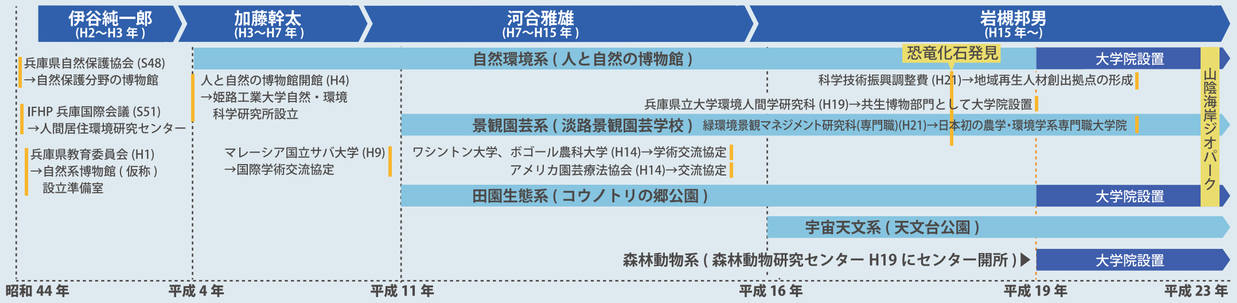
中瀬 勲（兵庫県立人と自然の博物館 副館長）

開館・開所式

ボルネオジャングル体験スクール

共生のひろば

「ひとはく」と「自然研」の歩み



ひとはくコラム

石ころに注目！

私たちの身の回りにはたくさんの石ころが転がっていますが、残念ながら多くの方にとっては、それらは何の価値もないものの代表のような存在かもしれません。しかし、実はどの石をとっても、長い地球の歴史の中で、さまざまな過程を経て生み出されたものなのです。

チャートという石があります。地層としてのチャートの分布は兵庫県内ではそれほど広くはありませんが、とても硬い石なので、川によって遠くまで運ばれるため、石ころは広い範囲に分布しています。加古川の下流部などでは石ころの半分くらいはチャートなのです。そのありふれたチャート、なんと1億数千万年以上前、陸の上には恐竜がいた頃かそれよりもさらに昔、日本から遠く離れた海で生きていた放散虫と呼ばれる小さなプランクトンの遺骸が、深海底に堆積したものが元になっているのです。海底に堆積した後、海洋プレートに乗って長い時間をかけて日本まで運ばれてきたのです。ルーペを使えば化石を見ることもできます。そうかと思えば、恐竜がいた時代の終わり頃、陸上にあった巨大な火山の噴火によってつくられた石もあります。

このようになにげない石ころにも地球の歴史が秘められているのです。みなさんも考えてみませんか。この石ころはどこからやってきたのか、なぜここにあるのかを。

古谷 裕
（兵庫県立人と自然の博物館　主任研究員）